

『論語』に見える「仁」について

玉置 重俊
北海道情報大学

The "Ren" thought in "Lun-Yu"

Shigetoshi TAMAKI
Hokkaido Information University

2020年12月

北海道情報大学紀要 第32巻 第1号別刷

< 論文 >

『論語』に見える「仁」について

玉置重俊*

The “Ren” thought in “Lun-Yu”

Shigetoshi TAMAKI

要旨

本論では、『論語』に見える「仁」の思想を具体的に究明してゆく。序章では、孔子の業績や彼が説いた「仁」を紹介する。第二章では、孔子が開いた学校の目的を論じる。第三章では、最晩年で孔子が説いた「仁」の性格を論じる。第四章では、「仁」に関する弟子たちと孔子との対話を究明する。第五章では、「仁」と「知」の関係、及び弟子たちの「仁」思想を考察する。最終章では、孔子の優れた教育方法とその時代的意義を論じる。

Abstract

This article examines the concept of “Ren” with respect to “Lun-Yu”. Chapter One introduces Confucius’ s achievements and his concept of “Ren” thought. Chapter Two describes the purpose of the school opened by Confucius. Chapter Three describes the characteristics of “Ren” thought in Confucius’ s final years. Chapter Four examines the dialog between Confucius and his students about “Ren” thought. Chapter Five explores the relationship between “Ren” and “Zhi ” thoughts, and the thoughts of one of his students about “Ren”. Finally , Chapter Six outlines Confucius’ s education system and its impact on that era.

キーワード

孔子(Confucius) 『論語』 (“Lun-Yu”) 「仁」 (“Ren”) 「君子」 (“junzi”) 学校 (school)

* 北海道情報大学経営情報学部システム情報学科教授, Professor, Department of System Information Science Faculty of Business Administration and Information Science

1. はじめに

中国思想史上においては、もちろん儒家学説の開祖である孔子(BC.551~479)の果たした功績や影響が、極めて大きいことは言を俟たない。特に彼が説いた「仁」、「義」、「礼」、「楽」、「智」、「信」、「孝」などの諸徳目は、孔子の死後も儒家学派の思想家たちにしっかりと継承、発展されながら、また他の学派の思想家たちにも多大な影響を与えて、長く中国及び世界の倫理、道徳思想として存在し続けてきた。

また、『論語』に見える諸徳目は、孔子が色々な状況や場面で説いたものがほとんどで、それらを語った時期や場所も分からず、話した対象者や目的なども多岐に及んでいるため、その徳目の内容や意味などを正確に理解することは、かなり難しい作業となる。ただ、これは、すべて『論語』という書物の編纂方法や性格に帰するので、どうすることもできない問題なのである。

本論では、孔子が説いた諸徳目の中から、「仁」という徳目に焦点を当てて、この意味内容を着実に検討して、孔子の思想の一端を究明したいと考える。また「仁」という哲理を選択した理由は、『論語』に見える「仁」は、孔子が説いた徳目の中でも、一番大事なものと認識されており、それはまさしく孔子の思想を研究する上での根幹を成しているからである。ただ、「仁」という徳目は、もちろん孔子が創造した哲学概念ではなく、孔子以前から、存在したものなのだが、なぜか孔子は、この哲学概念を最高の徳目に引き上げて、新しい生命を注入している。この件については、陳景磐が「孔子的教育思想」¹の中で、次のように述べている。

「仁」の字は、春秋時代の新しい名詞である。

この名詞は、必ずしも孔子が創造したものではない。しかし、孔子はこの名詞を特別に強調して、かつ輝かしさを加えて、彼の学説の中心思想としたのである。『論語』中には、孔子が「仁」を論じた記載は、五十八章もあり、「仁」を取りあげた回数は、百五回の多さにもなっている。確かに、孔子が「仁」を論じた意味内容には、非常に豊富なものがある。それは、ほとんどすべての道徳資質を総括したものである²。

ここには、孔子が「仁」という徳目に、新しい哲学概念を与えて、かつ彼の学説の中心思想においたことが、明記されている。また、山口察常も「仁と禮とに関する思想」³の中で、次のように主張する。

之を要するに孔子以前の仁字の意は、決して複雑な内容を有つたものでなく、唯人情の美しい性質に名づけたもので、極めて軽い意義を有つて居たに過ぎないと思う。乍併この簡単意義の中にも、既によく人を容れ、人を愛するの意があり、後の仁が決して突如として起つたものでないことを示すに足るものがあると思ふ。

以上の両氏の見解からも、孔子の説いた「仁」という徳目には、孔子以前の「仁」の哲学概念とは、極めて異なる意味内容が孕まれていることが、明瞭に理解できるわけである。

2. 孔子の弟子たちと孔子の学校について

孔子は人類の教師と言われ、弟子や門人が多かつたことは、周知の事実である。『史記』仲尼弟子列伝では、次の記載がある。

孔子曰、受業身通者七十有七人。皆異能之士也。德行。顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。政事。冉有、季路。言語。宰我、子貢。文學。

¹ 『孔子教育思想論文選』(1949-1980)(教育科学出版社、1981年10月)P15

² 参考：楊栄国『中国古代思想史』、三聯書店1954年版、第94-104頁

³ 『孔子の思想・伝記及年譜』所収、(春陽堂書店、1937年2月)P130

子游、子夏⁴。

上の意味は、「孔子は言われた。私の講義を受けて、しっかり（教養を）修得した者は、七十七名いる。全員が特別な才能の持ち主である。徳行では、顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓が優れており、政治では、冉有、季路で、言語では、宰我、子貢で、文学では、子游、子夏になる。」となる。このように、司馬遷は「仲尼弟子列伝」の最初の部分を書き始めて、その後、孔子の弟子たちの個々の国名や^{あざな}字、そして孔子との年齢差や性格や業績などを、具体的に記述している。

したがって、孔子の門下には、有能な弟子が多く、いつも孔子と弟子たちとの対話や議論が盛んに交わされていたことが容易に窺える。ただ、このような状況は、孔子の生涯においては、いったい何時頃のことになるのかについても、考えておく必要がある。ここからは、まずは孔子の生涯を簡単に把握してゆこう。『史記』『孔子世家』に拠れば、孔子の生涯は、次のように記されている。

孔子貧且賤。及長、嘗爲季氏史、料量平、嘗爲司職吏而畜蕃息。由是爲司空。已而去魯、斥乎齊、逐乎宋、衛、困於陳蔡之間、於是反魯。孔子長九尺六寸⁵、人皆謂之長人而異之。魯復善待、由是反魯。

上の意味は「孔子は家が貧しく、身分も^{いや}賤しかった。大人になってから、季氏の役人となったが、出納は公平で正確だった。かつて司職（牧畜を管理する）の役人となったが、その六畜は繁殖した。そのため、司空（土地と人民を管理する役人）になれた。その後は、魯を去ったが、齊で排斥され、宋・衛で逐われ、陳・蔡の間で困窮したので、やむなく魯に戻った。孔子は身の丈が九尺六寸あり、人々はみんな長人といって珍しがった。魯はまた良き待遇で

迎えたので、また魯に戻った。」となる。

ここには、孔子の生涯の略歴が要領よく記されているが、もう少し、筆者が詳しく孔子の経歴を補足してみると、孔子が活躍した時代は、春秋時代(BC770~BC476)の末期であり、その時代は、周王朝の権威も大きく失墜して、各国の群雄が割拠する動乱の世の中であった。孔子は55歳あたりから、魯国の政治や家臣たちの横暴さに耐えられず、とうとう自分の国を去って、諸国遊説の旅に出掛けることを決意する。諸国遊説中には、彼自身の「徳治政治」の学説⁶や「礼」思想の売り込みに、全力を傾注したが、結局、どの国にも、孔子の学説は受け入れてもらえず、また適切な待遇では、採用されなかった。したがって、孔子は14年間の諸国遊説の旅に見切りをつけて、晩年には、祖国である魯国に戻って来たのである。これには、魯国が孔子の帰国を切望しており、かつ良き待遇で、迎えたことにも、要因があったと考えられる。

上の孔子の経歴などからも、推測できるが、おそらく孔子が多く弟子たちと、自由で余裕ある討論や議論が十分に可能な時期は、孔子の生涯においては、最晩年のことにはないだろうか。おそらく、孔子が68歳頃から、祖国の魯に、私立学校を設営し始めて、教育事業に携わったと考えられる。因みに、孔子は73歳で亡くなるので、魯国での恵まれた最晩年の期間は、4~5年間程度となる。

もちろん、これ以前でも、孔子や弟子たちとの対話や討論は、『論語』の中で、多々あることは間違いないことだが、孔子が自分の哲学や学説をしっかりと確立できた時期は、彼が落ち着いた余生を送れた最晩年と推し量ることは、無理なこじつけにはならないと思われ

⁴ 同文が『論語』先進篇にあるが、政事と言語の順序が異なる

⁵ 周代の一尺は、現代の22.5cmなので、孔子は2m以上の大男になる。ただ、真偽はもちろん不明。

⁶ 『論語』為政篇の第一章句及び第三章句を参照されたい

る。特に、孔子門下で、討論や議論が盛んになって、それに伴い孔子自身の学説や思想にも、より一層充実さと深みを増してくるのは、やはり孔子が諸国流浪の旅から、郷里の魯国に戻り、君子育成のために、中国では初めての私立学校を開設した頃からと、推測したいと思う。この件については、木村英一『孔子と論語』にも、次の記載がある⁷。

彼の人生行路は困苦に満ちたものであったが、彼が生涯の最晩年において、この事業推進の最後の手段として魯に開設した私塾は、学校教育の上に新生面を開いた事業であり、彼によって整理され合理化された詩書禮樂の教養と、人倫道德の修行との道場であった。それは教育史上においても、延いては倫理史上・政治思想史上・文化史上においても、劃期的な事業であったのである。ここにも、孔子の学校は、彼の最晩年に開設されたとの見解がある。因みに、孔子の学校における教育の目標やねらいについても、触れておこう。単刀直入に言えば、そこでの教育目的とは、もちろん理想的な政治家である「君子」を創出することに、主眼が置かれたはずである。なぜならば、孔子自身も、どこかの国において、「徳治政治」を実現させたいと強く望んでいたし、また当時の世相や風潮も、いわゆる下克上の乱世であり、どこの国の君主においても、優れた政治家を採用して、「富国強兵」の政治を行ってもらい、最終的には、安定した秩序ある立派な強い国家を構築したいという気持ちは、当然あったと言えるからである。

したがって、当時の士の階層の人々は、孔子の学校において、理想の政治家である「君子」になるための教養や知識を学びながら、運が良ければ、孔子からの特別な推薦を受けて、どこかの国の役人や官僚に登用されることを夢

に見ていたのかも知れない。それ故に、当時としては、珍しいくらい多くの人々が、孔子の学校に集まってきたとも、容易に推測できる。このような孔子の学校における教育目標の件についても、木村英一『孔子と論語』には、この記載が見える⁸。

いったい孔子の塾の教育目標は、一般士族に對して、道德的にも教養的にも、國家社会の指導者として高級の官職に任じても適格者である様な訓練を施して、すぐれた君子を養成することであった。君子はもと卿・大夫として指導者の身分に属する教養豊かな人物を意味し、一般士族やそれが就職して一定の役職に任じた有司等よりも、高級な人物を指す言葉であったが、孔子は次第に周の身分制度の崩壊に適應して、道德も教養も高く、國家社会の指導者たるにふさわしい人物を、士族の理想的な人間像として君子と呼ぶに至っている。

このように、木村は孔子塾設立の教育目標は「すぐれた君子を養成することであった」と指摘している。確かに、『論語』の中で、多用される「君子」という用語には、「在位の人」、「有徳の人」、「学に志す人」という意味が考えられるのだが、それらを融合した「理想的な政治家」の意味と解釈しても、何も問題はないであろう。孔子は、彼自身の最晩年において、この「君子」の養成に尽力した結果、その情熱や影響には多大な成果があつて、後世においても、孔子という人物が極めて高く、かつ偉大に評価されたのであった。

3. 孔子が説いた「仁」の性格とその意義について

この節からは、『論語』の中から、「仁」に関する孔子自身の言葉について、具体的に

⁷ 木村英一『孔子と論語』所収（創文社、1971年、2月）P162

⁸ 木村英一『孔子と論語』所収（創文社、1971年、2月）P144

考察してゆこう。『論語』里仁篇には、次の言葉がある。

子曰、……君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。

上の意味は「先生は言われた。……君子は仁を離れて、どこに名声を上げられよう。君子は食事を終える間にも、仁に異なる行為はしないし、あわただしく、切迫した時にも仁に必ず基づき、将に倒れんとする、危急な時にも、必ず仁に基づくのである。」となろう。ここには、「君子」が片時も「仁」という徳目から離れてはならないことが強調されている。やはり「仁」という徳目の習得や獲得が孔門での一大目標であることは、明瞭である。『論語』衛靈公篇には、次の記載がある。

子曰、志士仁人、無求生以害仁。有殺身以成仁。

上の意味は「先生は言われた。志士とか仁人とかいわれる人物は、自分の身を生かさんがために、仁道を損なうことはしないし、自分の身を犠牲にしても、仁道を成し遂げることがある。」となろう。ここにも、孔子が「仁」を成し遂げるための心構えやその厳しさを弟子たちに、明確に説いている。上の二章句における孔子の言説は、孔門下での一大目標、あるいはスローガンのような感じになる。

ここからは、大胆な私見になるが、このようなタイプの章句をいささか集めてみたい。『論語』学而篇には、次の記載がある。

子曰、弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

上の意味は「先生は言われた。人の子弟である者は家に居ては父母に孝を尽くし、外に出ては目上の人に従順の道を尽くすべきである。また品行を謹みて、言葉には信実があるようにする。ひろく人々を愛して、仁徳に優れた人に近づき親しむ。このような努力をなして、行いに余力があれば、文(当時の詩や書などの経

典になるが、学問と考えてもよい)を学んでもよいであろう。」となろう。

ここには、最初に「弟子」という言葉が見え、かつ「文を学ばん」と結んでいるので、やはり孔門下における弟子たちの目標箴言に成り得ると考えられる。『論語』述而篇には、次の記載がある。

子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

上の意味は「先生は言われた。我々は先ず人の道を得ようと志し、自分が修養して得た徳を拠り所にして、最高の仁という愛に基づいて、その後に芸(当時は礼・楽・射・御・書・数などの六芸)に遊ぶのがよい。」となろう。ここでの言葉も、すべて簡潔なものではあるが、人としてバランスの取れた「君子」を養成するために、孔子は弟子たちに、常に語っていた箴言と思われる。同じく、述而篇には、次の章句がある。

子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣。

上の意味は「先生は言われた。仁というものは、遠くにあるであろうか。私が仁を求めれば、ここにすぐ仁は到来するのだ。」となろう。ここでは、孔子が弟子たちに、「仁」を実践することは、何も難しいことではなく、各自の意志力や努力によって、簡単に実行できるのだ、と勇気づけているかのようである。『論語』泰伯篇には、次の記載がある。

君子篤於親、則民興於仁。故舊不遺則民不偷。

上の意味は「上に立つ者が、自分の親戚身内の者に手厚い態度を取ると、人民が仁道に興起するようになる。古なじみ、知己の人などを忘れずに手厚くもてなすと、人民は決して人情がうすくはならないものである。」となろう。ここでの「君子」は、為政者という側面が強いため、とりあえず「上に立つ者」と口語訳してみた。孔門で学ぶ弟子たちは、やはり将来の「君子」という理想像を目指しているため、ここでの言葉も、学校での目標箴言に成り得る

可能性は高いと判断される。『論語』憲問篇には、次の記載がある。

子曰、君子而不仁者有矣夫。未有小人而仁者也。

上の意味は「先生は言われた。君子といわれるような人物でも、ある時には仁道から外れる人物もいる。しかし、小人といわれる人物で、仁道にかなった行いをなす人物は、いたためしがない。」となる。ここには、「君子」と「小人」という用語が対比されて、使用されており、弟子に対しては、あなたたちは「小人」になってはいけないよという意味もあるので、やはり学校での箴言と思われる。『論語』憲問篇には、次の記載がある。

子曰、君子道者三。我無能焉。仁者不憂、知者不惑、勇者不懼。子貢曰、夫子自道也。

上の意味は「先生は言われた。君子が道として踏み行うべき事柄が三つある。私は、どの一つも行ふことができない。仁者には憂いがない。知者には迷いがない。勇者には懼れがない。子貢は言われた。この三つのことは、先生ご自身のことを述べられたのだ。(先生は、仁者であり、知者であり、勇者なのである。)」となる。

ここでの「仁者は憂えず、知者は惑わず、勇者は懼れず」という表現は、語順は少し異なるが、同文が『論語』泰伯篇にも見えている。ここには、孔子が「一つも行ふことができない」という謙遜した態度を説いたが、ただ、終わりの部分には、孔門十哲の一人で、言語に優れた弟子の子貢が、孔子の言葉を否定する、簡単な感想を語った点は、この章句の存在価値を一段と高める効果をもたらしている。とにかく、これらの言葉も、孔門下における重要な目標箴言と考えてもよいと思う。『論語』衛霊公篇には、次の記載がある。

子曰、當仁不讓於師。

上の意味は「先生は言われた。仁を行うに当たっては、先生にも遠慮する必要はない。」とな

ろう。ここでも、孔子は弟子たちに、積極的な「仁」の実践を大いに推奨して、私にも遠慮はいらないと強調していたことが、理解できる。

因みに、別の章句にも、「仁」に関する孔子の短い言葉があるので、検討してゆこう。『論語』学而篇には、次の記載がある。

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

上の意味は「先生は言われた。巧みに言葉を上手に飾り、顔色のみをよくして、人に気にいられようと務める人物では、その人物の中には、本当に仁徳は少ないものだ。」となる。これと同じ章句は、『論語』陽貨篇にも存在する。大事な孔子の言葉という意味で、二回も掲載されたのかも知れないが、やはり弟子たちには、必ず教えたい重要な箴言である可能性は高いと思う。『論語』子路篇には、次の記載がある。

子曰、剛毅木訥近仁。

上の意味は「先生は言われた。剛(物に屈しないこと) 毅(果断であること) 木(飾り気のないこと) 訥(言葉数の少ないこと) は、本当の仁にはならないが、とても仁に近いものだ。」となる。これも、孔子が説いた言行としては、かなり短いけれども、内容は良く相手に伝わる、力強い箴言にあたるような気がする。

以上に紹介した『論語』の各章句は、孔子が最晩年あたりにおいて、彼の学校の中で、常時弟子の徳育教育の中で、語っていた箴言と判断したいと思う。ただ、その教育の現場や場所については、もちろん学校の中だけではなく、ある時には、郊外及び他の区域でも、孔子と弟子たちの対話や議論などは、自由に数多く行われたことが、容易に推測できよう。

4. 「仁」に関する弟子たちと孔子との対話について

孔子の教育方法には、「因材施教」という優れた特色があることも、もちろん有名なことである。これは、孔子が弟子たちのそれぞれの

能力や性格及び資質などに応じて、適切で丁寧な教育と指導を行うことである。孔子はこの教育方法と内容を用いて、孔門下における多様な弟子たちに対応したのである。「因材施教」という効果的な教育と指導の場面は、『論語』の中では枚挙にいとまがない⁹。

したがって、弟子が孔子に対して、「仁」の徳目を尋ねる際にも、孔子の回答や教える内容もそれぞれ異なっている。例えば、『論語』の中では、弟子の樊遲は「仁」に関して、三回孔子に質問しているが、毎回の孔子の回答や言行は異なっている。『論語』雍也篇には、次の記載がある。

樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣。問仁。曰、仁者先難而後獲。可謂仁矣。

上の意味は「樊遲が知者の態度を質問した。先生は言われた。人として当然行うべき道を努力して務め、鬼神に対しては、崇敬の気持ちは持つが、これを汚さぬよう、できるだけ遠ざけるのがよい。これが知者の態度である。次に、仁者の態度を樊遲が尋ねた。孔子は答えた。仁者は困難な仕事があれば、何はさておき、これをおのれの身に実行し、それによって得られる実益などは眼中におかない。これが仁者の態度である。」となる。ここでは、弟子の樊遲が孔子に、「知」と「仁」に関して、質問をしているが、彼は孔子から直接具体的な回答をもらっている。樊遲という弟子は、魯国の人で、孔子より46歳の年少者であり、孔子に様々の質問をしているが、それらはすべて彼の学問が未熟であった二十代のことと推測される¹⁰。『論語』顔淵篇には、次の記載がある。

樊遲問仁。子曰、愛人。問知。子曰、知人。樊遲未達。子曰、舉直錯諸枉、能使枉者直。

樊遲退見子夏曰、郷也吾見於夫子而問知。子曰、舉直錯諸枉、能使枉者直。何謂也。子夏曰、富哉言乎。舜有天下、選於衆、舉臯陶、不仁者遠矣。湯有天下、選於衆、舉伊尹、不仁者遠矣。

上の意味は「樊遲が仁について、質問した。先生は言われた。人を愛することである。次に知について、質問した。先生は答えた。人を知ることである。樊遲は「知」については十分理解できなかった。それで、先生はまた説明した。真っ直ぐで平らな材木を曲がった材木の上に載せておくと、いつの間にか、曲がった材木を真っ直ぐにしてしまうものだ。樊遲は(その意味も分からなかったが、)退席した。彼が子夏に会ったとき、こう尋ねた。私が前に先生に面会したとき、先生は、真っ直ぐで平らな材木を曲がった材木の上に載せておくと、いつの間にか、曲がった材木を真っ直ぐにしてしまうものだ、と答えられましたが、どういう意味ですか。子夏は言われた。先生のお答えは、内容が豊富ですね。舜が天を保有していたとき、大衆の中から、選んで臯陶という正直者を挙げ用いたが、そのために、不仁者が遠くへ行き、遂にいなくなった。湯が天下を保有していたときは、大衆の中から、選んで伊尹という正直者を挙げ用いたが、そのために、不仁者は遠くへ行き、遂にいなくなったのである。」となる。

ここでも、弟子の樊遲は孔子に、「仁」と「知」について、質問しており、特に「知」についての事柄は、先生の譬え話を聞いても理解できなかった。その後、兄弟子の子夏に出会ったおりに、再度、先生の譬え話の真意を聞いて、子夏からも具体的な回答を得た場面の章句になっている。

子夏という弟子は、孔子より44歳の年少

⁹ 『論語』先進篇の第二十章句はその代表になるが、つまり行動に積極性のある子路と、反対に行動に消極的な冉有という二人の弟子の性格を理解して、彼らに対する孔子の言葉あるいは教導などは、大きく異なっている。

¹⁰ 諸橋轍次『論語人物考』(春陽堂書店、1937年5月)P34-36

であるが、孔門十哲の一人で、文学（当時の学問では詩経や書経などの経書にあたる）に秀でた人物で、非常に学問を好み、六経を後世に伝える上で大功があったらしい¹¹。彼は、孔子の譬え話もよく分かり、また理解できない弟子に対しては、更に別の説明や物語を話して、孔子の言葉の真意を悟らせようと試みたのであった。

ここでは、孔子が自分の説いた言葉を弟子にきちんと理解させられない場合には、再度分かり易い譬え話をしっかり用意している点、また弟子の方でも、孔子の言葉の真意などについては、兄弟子にも、その真意の解説や解釈などを求める、素晴らしい勉学の環境と方法の状況があったことは、十分に理解できる。このような対話や討論を通して、孔門の弟子たちは、それぞれの知識と才能を少しずつ高めて行けたのかも知れない。因みに、このような弟子たちの相互啓発教育の状況は、もちろん孔子門下では、ごく普通の事柄となっていたと思われる。では、三回目の樊遲の質問も、検討してゆこう。『論語』子路篇には、次の記載がある。

樊遲問仁。子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也。

上の意味は「樊遲は仁について、質問した。先生は言われた。自分が如何なる場所及び地位にいても、常に恭という心の慎みを忘れず、また事柄を執り行うに当たっては、常に敬という心の慎みを失わず、さらに人と接する場合には、常に忠という心の誠を尽くすべきである。もし礼儀なく、道徳のない夷狄に行っても、この恭・敬・忠という徳目は、捨て去ることはできない。」となる。ここでは、「仁」という哲理には、「恭」・「敬」・「忠」などの徳目が必要とされ、実際に「仁」を実践する

上では、それらに基づくことが強調されている。

以上の孔子と樊遲との「仁」に関する対話や問答などからは、次の三点が了解できると思う。一つは、孔子は、学問の初心者に対しても、できるだけ分かり易い説明や回答をするよう、工夫を凝らしている。一つは、孔子は、弟子の知識や能力に応じた段階的な回答や譬え話を成そうと考えている。一つは、優秀な弟子には、積極的に未熟な弟子を指導できるような学習環境と方法をうまく構築している。

ところで、樊遲以外の孔門の弟子たちも、よく「仁」については、孔子に質問しているので、それらにも、検討を加えてみよう。孔門の中で、ただ一人孔子から、仁者であると賞賛された弟子がいる。それは、顔回という人物で、孔子より30歳年下ではあるが、孔門の十哲の德行科に挙げられ、極めて秀才であった¹²。ただ、彼は不運にも、孔子在世中に、若死にしまった。顔回が亡くなったときに、孔子は「ああ、天、予を喪ぼす」と二回も叫んで、慟哭している¹³。また、彼の人柄について、『論語』雍也篇には、次の記載がある。

哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者、好學不遷怒。不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。

上の意味は「（魯の君）哀公が質問をした。あなたの弟子たちの中で、誰が学問を好みますか。孔子は答えた。顔回という者がおり、学問を好んで、怒りを遷すようなことはしませんし、一度犯した過ちは繰り返しません。この者は不幸にして、短命で死んでしまいました。今は、学問好きな弟子はおりません。そして、この者以外で、学問が好きだという者を聞いたこともありません。」となる。ここでは、孔子が自分の弟子の中では、一人顔回だけが好

¹¹ 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P16-22

¹² 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P39-44

¹³ 『論語』先進篇に、「顔淵死。子曰、噫、天喪予、天喪予。」とある。

学の士であり、現在はそのような者はいない、と断言している。顔回の人柄が、孔子に絶賛されていることは、一目瞭然であろう。とにかく、彼は孔子最愛の弟子の一人であった。『論語』雍也篇には、次の記載もある。

子曰、回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣。

上の意味は「先生は言われた。顔回は、立派に修養ができていて、彼の心は三ヶ月の長い間に亘って、人道に違ふことはなかった。その他の弟子たちは、ある者は一日だけであったり、ある者は一ヶ月だけであったりと、長くは続かなかった。」となる。

この章句には、内容の面で、極めて大きな意義を有している。それは、孔門下の中では、顔回という弟子だけに、孔子は「仁者」という名誉を与えている点である。このことは、「仁者」という人物は、人間の手の届かない存在ではなく、人間の努力と修養によって、現実に必ず到達できる人物に成り得るわけである。

したがって、孔子のこのような言葉を弟子や門人たちが聞いたならば、やはり顔回のような仁者になりたいと、思うのは自然なことであろう。孔門下のすべての弟子や門人は、仁者となって、孔子からの素晴らしい賛辞を得ようとするのは、当然の傾向だと考えられる。つまり顔回の存在自体が、孔門下においては、弟子や門人たちが、道德や学問を切磋琢磨して、高めてゆくための原動力になっていることは間違いないと思われる。

同時に、顔回の存在は、孔子にとっても極めて貴重な弟子であったが、それ以外にも、顔回その人の孔門下での評判や名声及び諸活動などは、すなわち多くの弟子や門人たちの素晴らしい手本や目標となっていたのである。もしかすると、孔子は、徳育と知育の両面において、このような弟子間で競い合う教育方法には、多大な効果と成果があることにも、十分に気がついていたのかも知れない。やはり、孔子

は教育者としても、さすがに非凡な才能を有する偉大な人物であったことが確認できる。

さて、顔回が孔子に「仁」を尋ねている章句もあるので、見てゆこう。『論語』顔淵篇には、次の記載がある。

顔淵問仁。子曰、克己復禮。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。顔淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顔淵曰、回雖不敏、請事斯語矣。

上の意味は「顔淵が仁を質問した。先生は答えた。我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返るのが仁である。もしある人が一日でも我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返ることができれば、天下の人々がみな仁に帰するようになるであろう。仁は自分の力でできるのであって、他人の力によるのではない。顔淵は、その要点を教えてくださいと言った。先生は言われた。礼でなければ、見てはいけない。礼でなければ、聞いてはいけない。礼でなければ、動いてはいけない。顔淵は、答えた。私は愚鈍ではありますが、これらの言葉を実践できるよう努めます。」となる。

この章句は、孔門の一番の秀才である顔回が、孔子が説いた最高の哲理である「仁」について、質問したので、極めて注目されている。ここでは、孔子が「仁」の実践には、「礼」という準則との合一が必要と説いたことと、また孔子は「克己復禮爲仁」という古諺を取りあげて、その古諺に新しい命を与えたことの二点を、しっかり把握する必要がある。『春秋左氏伝』昭公十二年に、次の文がある。

仲尼曰、古也有志。克己復禮爲仁也。

上の意味は「仲尼（孔子の本名）は言われた。古諺に書いてある。『我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返るのが仁である。』」となる。

このように、孔子は当時の古諺の言葉を引

用して、彼の哲理を主張している。孔子の説いた言葉の中に、いくつかの古語、及び古諺が存在することは、やはり推測できる事柄である。なぜならば、当代一と言われる礼文化に関する学識と教養、及び学問に対する、比類なき意欲と情熱を有する孔子であれば、古典の中から、古語や古諺を簡単に取り出す作業は、容易なものと成り得るからである。この件については、藤塚鄰『論語總説』の中でも、明記されている¹⁴ので、参照していただきたい。

顔回以外の弟子たちも、「仁」について、孔子に質問しているので、これらにも、考察を加えたい。『論語』顔淵篇には、次の記載がある。

仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣。

上の意味は「仲弓は仁について、質問した。先生は言われた。ひとたび家の門を出て、社会の人々に接する場合は、あたかも貴い賓客を見るように、己の身を慎み、また民を使う場合には、あたかも国家の大きな祭典を承り奉じて、執り行うような気持ちで、進めてゆく。自分自身が希望しないことを、他の人に仕掛けてゆくようなことはしない。これができれば、国の中でも、人から恨みを受けることもなく、卿大夫の家の中に居ても、人から恨みを受けることはないであろう。仲弓は答えた。私は愚かな者ではありますが、この三つの言葉を実践できるように、努めたいと思います。」となる。

仲弓も、孔門の中では、十哲の一人で、德行請科に属し、魯国の人で、孔子との年齢差は29歳となる。優秀な弟子であったが、ある人が「雍(仲弓の本名)は仁にして佞ならず」と言っている¹⁵場面もあるので、彼は言葉数が少ない、実直な人のようでもある¹⁶。そのため

か、孔子の言行も、仲弓が為政者になったときの心構えを説いたのかも知れない。次の章句も、同じく顔淵篇に見える。

司馬牛問仁。子曰仁者其言也訥。曰、其言也訥、斯謂之仁已乎。子曰、爲之難。言之得無訥乎。

上の意味は「司馬牛は仁について、孔子に質問した。先生は言われた。仁者というものは、その言葉を口から出し洩る、すなわち言葉を憚り、慎むものである。また尋ねた。その言葉を出し洩る、ただそれだけのことを以て、仁ということができるのでしょうか。先生は答えた。すべての人は、実行することが難しい。実行が難しいとなれば、言葉を口に出して言うことは、差し控えずにはおられまい。」となる。司馬牛という人物は、孔門においては、それほど重要な弟子ではないが、何かの事情で、孔子の所に来て、勉強していたのであろう。彼の人物像については、よく分からないが、伝説では、彼には宋国に、司馬桓魋という評判の悪い兄がいたらしく、そのことで、本人は色々と悩んでいたらしい。『論語』陽貨篇には、次の記載がある。

子張問仁於孔子。孔子曰、能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰、恭・寛・信・敏・惠。恭則不侮、寛則得衆、信則人任焉、敏則有功、惠則足以使人。

上の意味は「子張は仁について、孔子に質問した。孔先生は言われた。五つの徳を至る所において、立派に実行してゆくことが仁である。その五つの徳とは如何なるものかお教えください。先生は答えた。恭(態度に慎みがあること)・寛(寛大なこと)・信(言葉に偽りのないこと)・敏(物事の処理が敏速なこと)・惠(恵み深いこと)であると述べ、その後五つの徳の効果については、上の人の態度に慎み

¹⁴ 藤塚鄰『論語總説』(国書刊行会、1988年 11月) P30-32

¹⁵ 『論語』公冶長篇に「或曰、雍也仁而不佞。」とある。

¹⁶ 諸橋轍次『論語人物考』(春陽堂書店、1937年5月) P75-76

があれば、下の者は侮り軽んずることはしない。上の人が寛大であれば、大勢の者が自然に集まってくる。上の人の言行に信実があれば、民は安心して、その人に事を任す。上の人が物事を敏速に処理してゆくと、成績が上がる。上の人が恵み深ければ、人民を使役できるようになる、と説明した。」となる。

子張という人物は、孔門下では、重要な弟子の一人で、陳国の人になり、孔子とは48歳離れている¹⁷。ここでは、孔子が若い弟子である子張の質問に対して、具体的に回答したが、要するに、「仁」という哲理には、「恭」・「寛」・「信」・「敏」・「恵」などの五つの徳目が必要不可欠であることが説かれている。『論語』雍也篇には、次の記載がある。

子貢曰、如有博施於民而能濟衆、何如、可謂仁乎。子曰、何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也已。

上の意味は「子貢は言われた。もしひろく民全体に恩恵を施し、また苦しんでいる多数の人々を救済できる人があれば、その人を仁者と言ってよいでしょうか。先生は答えた。それだけのことができれば、仁者どころではなく、聖人と言うべきであろう。古の聖天子である堯・舜でさえも、このことには苦心されたからである。仁者という人は、自分が身を立てたい、地位に立ちたいと思う場合には、先ずは人の身を立て、人を地位に立たせてあげる。自分が事に通達したい、高位高官に達したいと思う場合には、先ずは人を高位高官に達せしめてあげる。このように、ごく身近にたとえを取って、考えてゆければ、これが、仁に到達する方法である。」となる。

ここでは、孔門十哲の一人であり、言語に秀でた子貢が「仁」について、孔子に質問してい

る。子貢は、衛国の人で、孔子より31歳の年少ではある¹⁸が、弟子としては大物で、孔門下では、ずっと経済的支援を果たした人物であった。彼も、孔子からの信頼は極めて厚く、やはり孔子最愛の弟子の一人になろう。ここでの対話においては、孔門下における徳目の中では、「仁」が最高のものではなく、その上に、「聖」という徳目があることが、確認できる。因みに、この章句の孔子の言葉と関係する内容のものが、『論語』述而篇に見えるので、紹介しよう。

子曰、若聖與仁、則吾豈敢。抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣。公西華曰、正唯弟子不能學也。

上の意味は「先生は言われた。聖人とか仁者とかいうものは、到底自分の任じ得る所ではない。ただ、自分としては、道を学んで飽きることがなく、学問などを人に教えて倦むことがないという点、それだけであるということができよう。門人の公西華は言った。それらのことこそ、本当に我ら弟子たちのできないことです。」となる。

ここでは、「聖人とか仁者とかいうものは、到底自分の任じ得る所ではない」という孔子の謙虚な姿勢が現れているが、同時に、この言葉を聞いた弟子の公西華からは、やはり孔子は、既に「聖人」か、あるいは「仁者」の境地に入っているとの高い評価を受けた章句になる。公西華は、魯国の人で、孔子より42歳若く、謙虚な性格であつたらしい¹⁹。とにかく、この章句には、孔子自身の自己評価に対して、弟子の補足説明などを加えて、内容の充実と深化を計っているように思われる。

この節の最後になるが、孔門下での十大弟子の一人で、言語に優れた宰我という弟子が、孔子におもしろい質問をしている箇所がある

¹⁷ 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P57-59

¹⁸ 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P25-33

¹⁹ 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P79-80

ので、見てゆこう。『論語』雍也篇には、次の記載がある。

宰我问曰、仁者雖告之曰井有仁焉、其從之也。子曰、何爲其然也。君子可逝也。不可陷也。可欺也。不可罔也。

上の意味は「宰我が質問をした。仁者に井戸の中に落ちた人が居ますと誰かが言った場合に、仁者はただちに井戸に下りて、その人を救済しますか。先生は答えた。どうして、そんなことがあるか。君子という人は、そばまで行かせることはできるが、(井戸の中まで)落とし込むことはできない。ちょっと騙すことはできても、どこまでも欺くことはできない。」となる。

宰我という弟子は、『論語』の中では、孔子から昼寝を厳しく咎められたり²⁰、「三年の喪」の短縮を孔子に求めて、孔子から非難され、「不仁者」と認定されてしまったり²¹で、本当に、孔子からはまったくいい評価をもらえていない、極めて不運な弟子になっている。ただ、このような弟子でさえ、「仁」については、自由に、自分の見解を述べているので、孔門下では、「仁」に関する討論や話題が多岐に亘って、盛行していたことは間違いないと思われる。このような状況は、次の章句からも、しっかりと看取できる。『論語』公冶長篇には、次の記載がある。

孟武伯問、子路仁乎。子曰、不知也。又問。子曰由也千乘之國、可使治其賦也、不知其仁也。求也何如。子曰、求也千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也。不知其仁也。赤也何如。子曰、赤也束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也。

上の意味は「孟武伯は、尋ねた。子路は仁者で

すか。孔子は分からないと答えた。更に尋ねた。先生は答えた。由は諸侯の国において、その軍事上の賦役を治めることができるが、彼が仁者かどうかは分かりません。求(冉有)はどうですか。先生は答えた。求は戸数千戸の大きな村、あるいは兵車百乗を出す卿大夫の家において、その長官をさせることはできるが、彼が仁者かどうかは、分かりません。赤(公西華)はどうですか。先生は答えた。赤は衣冠束帯を整えて、朝廷堂廟に立ち、外国の賓客と応対させることができるが、彼が仁者かどうかは、分かりません。」となる。

ここでは、魯の大夫である孟武伯が、孔門の三人の弟子(子路・冉有・公西華)が仁者なのかについて、孔子に尋ねており、かつ孔子も三人の弟子のそれぞれの才能や特性にも、丁寧に解説を入れながら、回答する場面が記されている。

子路は、卞国の人で、孔子より9歳若く、孔門での大物弟子であり、もちろん孔門十哲の一人で、政治に秀でた人物であった²²。『論語』の中では、特に「勇」を好んだ弟子として有名であり、孔子には色々と叱られもする場面も多いのだが、やはり孔子の最愛の弟子の一人となる。冉有(名は求)魯国の人で、孔子より、29歳の年少で、彼は非常に温和で謙遜であったが、反面弱い性格の持ち主とも指摘される²³。『論語』の中では、孔子に「吾が徒に非ざるなり、小子鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり」と、厳しく批判される場面もある²⁴。公西華(名は赤)については、前に紹介している。

このように、魯国の大夫からも、弟子たちの誰が仁者に当てはまるのかについて、孔子に

²⁰ 『論語』公冶長篇の第10章句を参照。

²¹ 『論語』陽貨篇の第21章句を参照。

²² 諸橋轍次『論語人物考』(春陽堂書店、1937年5月)P79-80

²³ 諸橋轍次『論語人物考』(春陽堂書店、1937年5月)P60-64

²⁴ 『論語』先進篇の第16章句を参照。

質問する具体的な状況が見えるが、孔子はなかなか彼らを仁者とは認定していない事実も、確実に判明してくる。とにかく、孔門での「仁」重視の教育内容とその実態は、魯国の中でも、広く知れ渡り、様々の人々の強い関心と呼んでいたことは、明瞭で有名な事柄となっていたと言えよう。

このほかにも、孔門の中では、弟子たちが自由に、仲間の弟子たちを「仁者」であるとか、そうではないとか、端的に論評している章句もあるので、検討してゆこう。『論語』子張篇には、次の章句が記載されている。

子游曰、吾友張也、爲難能也。然而未仁。上の意味は「子游は言われた。我が友人の子張は、なかなかできにくいことをやり遂げる。しかし、まだ仁ではない。」となろう。子游は、呉国の人で、孔子より36歳若く、非常に公明方正な人であったらしい²⁵。ここでは、彼が子張は、難しいことを成し遂げる人だが、仁者ではない、と断定している。同じく、子張篇には、次の章句もある。

曾子曰、堂堂乎張也、難與竝爲仁矣。上の意味は「曾子は言われた。堂堂としているね、子張の態度は。しかし、共に協力して、仁を成し遂げることは難しい。」となろう。ここでも、前章句と同様に、曾子は子張を「共に協力して、仁を成し遂げることは難しい」と判定している。このように、子游や曾子らの他の弟子に対する論評などは、当然のことながら、孔門下での「仁」に関する討論や議論などの流行を的確に現している。

以上の具体的な考察から、孔子が多くの子供たちと「仁」に関して、自由に様々な対話や討論及び議論をしている状況は、明瞭に知ることができた。ただ、そこでの対話や討論及び議論においては、孔子の言説の中に、それぞれの弟子に対する配慮や思いやりなどがあるこ

とも、同様に確認することができる。また、孔子の説いた「仁」という哲理の中には、孔子が君子を養成する上での、何らかの目的や理由もしっかり包括されている点があることも、明確に認識すべきであろう。

5. 「仁」と「知」の関係について

孔子は、「仁」の徳目を語るときには、「知」についても、その徳目の大切さに触れているので、いささか検討してゆこう。『論語』里仁篇には、次の記載がある。

子曰、里仁爲美。擇不處仁、焉得知。

上の意味は「先生は言われた。人は仁に居るのが美德なのである。あれこれ選んで、人が仁を外れるのでは、どうして智者となることができようか。」となろう。ここでは、智者は常に「仁」から外れずに、「仁」という徳目を保持している人物という考えであろう。同じく里仁篇の次の章句を見てゆこう。

子曰、不仁者不可以久處約。不可以長處樂。仁者安仁、知者利仁。

上の意味は「不仁な人は、いつまでも窮乏の境地には居られないし（その人は苦しさに堪えられず、悪いことをしてしまうから）、長くは安楽な境地も居られない（その人は必ず墮落してしまうから）。仁者は仁の境地に安んじし、智者は仁の境地を善いことと認めて、それを活用する。」となろう。ここには、不仁者は修養が足りないの、心に迷いが生じるが、仁者と智者は、どんな境遇におかれても、何らの迷いや不安なく、生きていけると説いている。『論語』雍也篇には、次の記載がある。

子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。

上の意味は「先生は言われた。智の人は水を楽しむが、仁の人は山を楽しむ。智の人は動くけれど、仁の人は静かである。智の人は楽しみ、

²⁵ 諸橋轍次『論語人物考』（春陽堂書店、1937年5月）P37-38

仁の人は命が長い。」となろう。この章句の正確な解釈は、どんな研究者にとっても、やはり至難の仕事である。ただ、孔子は、「仁者」と「智者」には、人格および品格における優劣を認めていないし、また彼らの愛好するものや特性などを大いに賞賛して、憧れているように、感じられる。とにかく、「仁者」にも、「智」という徳目は必要であり、「智者」にも、「仁」という徳目は必要となるので、それらは不可分なものであることを主張したいのかも知れない。しかし、この章句において、「仁者」と「智者」には、やはり優劣があると指摘する研究者もいるので、いささか彼の見解を紹介したい。中島徳蔵『論語の組織的研究』には、以下の文が見える²⁶。

されば知は人間最上の徳なるかと云うふに、……孔子は知は仁に比すれば尚ほ軽く、言はば仁に到る手段的の徳なりとせしもの如し。かくて仁者は仁に居て動かざるに、知者は仁に到らんと尚ほ汲々と勉強するを見る（里、二）。同一の趣意にて、仁者は山の如く動かずして静かなるに、知者は水の如く多忙なり。知者は道の為めに此の多忙を楽しむも、仁者は既に到り尽くしたるを以て、何時までも其の位置を保持すれば足る。故に知者は楽しみ、仁者は壽しともいふ所以なり。

確かに上の解釈には、「智者」に対する考察に、優れた鋭い見解が盛り込まれているので、筆者の訳文よりは、孔子の言葉をより一層理解できるであろう。『論語』衛霊公篇には、次の記載がある。

子曰、知及之、仁不能守之、雖得之、必失之。知及之、仁能守之、不莊以蒞之、則民不敬。知及之、仁能守之、莊以蒞之、動不以禮、未善也。

上の意味は「先生は言われた。人に君たる者の

知識が、あまねく民の事情に通じても、仁恵で民の生活を守れないならば、一旦は民心を得ることはあっても、結局は必ず民心を失うであろう。いかに人君の知識があまねく民の事情に通じ、その仁恵が民の生活を守れても、莊重な態度を持って民に臨まなければ、民は人君を尊敬しない。更に、その知識は民に及び、その仁恵は民を守れて、莊重な態度を持って民に臨んでも、民を動かす場合に、礼を使用しなければ、まだ完全とはいえない。」となろう。

ここでは、「知」、「仁」、「莊」、「礼」などの徳目は、すべてが連携して、合同で実施されることにより、人民の統治がうまく完成される、と指摘している。『論語』公冶長篇には、次の記載がある。

子張問曰、令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色、舊令尹之政、必以告新令尹、何如。子曰、忠矣。曰、仁矣乎。未知、焉得仁。崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶吾大夫崔子也、違之、之一邦、則又曰、猶吾大夫崔子也、違之、如何。子曰、清矣。曰、仁矣乎。曰、未知、焉得仁。

上の意味は「子張は尋ねた。令尹（宰相）子文は、三回仕えて、いつも令尹となったが、喜んだ顔色はなかった。三回辞めさせられたが、怒った顔色はなかった。旧令尹の政治仕事は必ず新令尹に伝達した。彼の仕事ぶりは、どうですか。先生は言われた。忠である。仁者ではありませんか。まだ智者とは言えないので、どうして仁者になれるであろうか。崔子は齊国の君を殺しました。陳文子は、馬を四十頭持っていたが、それらを棄てて、（齊国を）去りました。他国に行き着くと、『やはりうちの家老の崔子と同じことだ』と言って、そこを去り、別の国に行くと、また『やはりうちの家老の崔子

²⁶ 中島徳蔵『論語の組織的研究』（大日本出版株式会社、1941年2月）（大空社、2011年11月、「論語」叢書六 所収）P185

と同じことだ』と言って、そこも去りました。これはどうですか。先生は答えた。清である。仁者ではありませんか。まだ、智者とは言えないので、どうして仁者になれるであろうか。」となる。

ここでは、孔子と48歳も離れた弟子の子張が、令尹子文と陳文子の二人の人物は、「仁者」に当たるのではないですかと、孔子に質問したが、孔子はそれぞれ「忠である」、「清である」とのみ判定し、やはり「仁者」とは認めていない。その要因には、彼らは「智者」ではないからという言説を語っている。

したがって、孔門では、「仁者」の条件としては、「智」という徳目も、兼ね備えておく必要が看取される。あともう一点、「仁者」の性格として、大事なことが、記されているので、検討しよう。『論語』里仁篇には、次の記載がある。

子曰、惟仁者能好人、能惡人。

上の意味は「先生は言われた。ただ仁者だけが、(私欲や私心がないから)本当に人を好きになることもできるし、人を憎むこともできる。」となる。ここでは、「仁者」も本当に、人を憎むことがあることが、確認できる。孔子自身も、この仁者が憎む件については、弟子の子貢と、具体的な対話をしながら、自説を語っている。『論語』陽貨篇で、次のような記載がある。

子貢曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡。惡稱人之惡者。惡居下流而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。曰、賜也亦有惡乎。惡徼以爲知者。惡不遜以爲勇者。惡訐以爲直者。

上の意味は「子貢は言われた。君子でも憎むことはありますか。先生は答えた。憎むことはある。人の欠点を口に唱え、世間に言いふらす者を憎む。自分が下級の地位におりながら、上級の地位にある者の悪口を言う者を憎む。勇気はあるが礼節を知らない者を憎む。事を行うに決断があつて素早い、物事の条理に通せ

ず、理路の塞がる者を憎む。先生は尋ねた。賜(子貢の名前)にも、憎む者があるのか。彼は答えた。(他人の意を)かすめ取って、それを智だとしている者を憎みます。傲慢でいて、それを勇だとしている者を憎みます。(他人の隠し事を)暴いて、それを正直な行為としている者を憎みます。」となる。

ここでの「君子」は孔子のことと考えてよいと思う。この章句からは、孔子も弟子の子貢にも、当然のことながら、人を憎むという感情は持っていて、彼らがどのような性格の人々を憎むのか、それぞれの具体的な人間像もしっかり説かれている。

次の章句には、「仁」について、孔子自身の言葉ではないが、孔門下での弟子・有子(名前は若)の言説が見えるので、検討してみよう。『論語』学而篇には、次の記載がある。

有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣。

不好犯上而好作亂者、未之有也。君子務本、本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。

上の意味は「有子は言われた。その人柄が孝行悌順でありながら、目上の人に逆らうような人は少ない。目上に逆らうことが嫌いで、反乱をしようとする者は、いたためしが無い。君子という人は、根本に務める人で、根本が作られてから、道は発生してくる。孝行・悌順というものは、「仁」の根本になるのだ。」となる。有子という弟子は、孔子より四十三歳若い、孔子と容貌がよく似ており、思想的にも孔子と同じ傾向があるということで、孔子の後継者と見なされていたようだ。

したがって、この章句での有子の言説も、彼の師である孔子の思想に近いと判断できよう。「孝」に関する孔子の言葉は、『論語』の中に、何度も現れるので、もちろん孔子も「孝」の徳目を重視していたことは、明瞭である。そうすると、有子の言説はすなわち孔子の思想を体現している側面があるので、彼の「孝行・悌順というものは、「仁」の根本になるのだ」

という言葉は、孔子の思想を表しているのかも知れない。これと同様に、有子以外の孔子の弟子たちも、「仁」の思想について、独自の思想を展開している章句も見られる。『論語』泰伯篇には、次の記載がある。

曾子曰、士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。

上の意味は「曾先生は言われた。士なる人は度量が広く、意志が堅固でなければならない。任務は重くて道は遠いからである。仁をおのれの任務とする、なんと重いものではないか。死ぬまで止めないのだから、なんと遠いものではないか。」となる。 「仁」を語る曾子の言葉については、『論語』顔淵篇には、次の記載がある。

曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

上の意味は「曾先生は言われた。君子は文事（詩書礼楽）よって友達を集め、友達によって仁の徳を助ける。」となる。また、孔子の弟子・子夏の言葉も見える。『論語』子張篇には、次の記載がある。

子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。

上の意味は「子夏は言われた。（学問をするに当たっては、）広く何事をも学ぶことに心がけ、その学んだところに厚く志してこれを信ずるようになる。我が身に切実になっていることを問いただすことに努め、そして身近なものとして考えて行くようにするなら、仁の徳はそこにおのずから育つものだ。」となる。ここには、子夏独自の学問の方法を説くのだが、「仁」の哲理の説明にもなっている。とにかく、孔子の弟子たちも、孔子が説いた「仁」の思想をきちんと継承しており、それを発展させたいと望んでいる姿勢は、明瞭に理解できる。

以上、この節では、「仁」と「知」（「智」）の重要な関係を研究したが、特に為政者にとっては、両者が必要不可欠な思想であって、こ

れらは人民統治の要道に成り得るものなのである。また「仁者」と「智者」との対照的な趣向及び境地、あるいは、「仁者」の具体的な性格についても、いささか考察を加えてみた。

最終部では、「孝」という思想が、孔子の説いた「仁」という徳目の根本、あるいは根幹を成していることと、孔門における孔子の後継者と見なされる弟子たちが、孔子が説いた「仁」の哲理を、彼ら自身の思想の中に取り入れて、さらにその思想を社会に広めて、普及、発展させようという傾向や姿勢も、確認できたと思われる。

6. おわりに

これまで、専ら『論語』の中における「仁」の哲理に対して、いささか解明と考察に取り組んできた。孔子が説いた「仁」の意味内容には、孔子が単独で語った言行や弟子や他人との対話の中で話されたものも多数あり、複雑でかつ難しい。したがって、『論語』の中における「仁」の研究は、やはり重い研究価値を有する難題であることは、着実に認識できた。

孔子が説いた「仁」という哲理を正確に分析し、解明してゆくためには、孔子の生涯や最晩年における教育活動及び弟子たちとの具体的な対話や討論などにも、鋭い考察と究明を加えていかなければならない。孔子は、最晩年の郷里での私立学校において、「仁」を中心とした徳育と知育の仕事に全力を傾注したが、その究極の目的には、理想的な政治家としての「君子」をしっかりと養成することにあつたのである。

孔子の学校の中では、もちろん「仁」以外の思想も学ぶ必要はあつたが、やはり孔子が新しい哲理と課題を提唱した「仁」には、神秘的で不思議な魅力があり、孔門下の弟子や門人たちは、その修得と達成に懸命に努力して、励んだと言える。

ただ、孔門下の多くの弟子や門人たちが、

「仁」の哲理と思想を確実に学んで、それを獲得するためには、孔子との対話や討論は、必須の手段であったため、彼らは積極的に「仁」についての質問を繰り返したのであった。孔子との対話や討論は、学校の内外で盛んに行われ、その時代での画期的な勉学方法になって、社会に広く浸透したのは、まさに孔子が創造した教育環境、教育方法、教育姿勢などに強く起因していると思われる。

特に、「因材施教」の教育方法は、孔子が多くの弟子の個性、能力、知識及び経歴などを、十分に知り尽くしていたからこそ、当時においても、実現可能で、素晴らしい教育効果や成果を無限にもたらしたのであろう。この点から考えても、孔子ほどの優れた、魅力ある偉大な教師が、2500年前に存在していた事実には、畏敬と驚異の念を抱かずにはいられない。

とにかく、当時の孔子の学校において、多数の有能な弟子や門人が集まり、「君子」を目指して切磋琢磨し、「仁」の修得に精励した積極的な姿勢は、まさに古代中国における思想・文化の蓄積と成熟の大きさを確実に体現しているものである。

参考文献

- 木村英一（1971）『孔子と論語』創文社。
中島徳蔵（1941）『論語の組織的研究』大日本出版株式会社。（この書籍は、「論語」叢書六（大空社、2011年10月）に所収されている。
諸橋轍次（1968）『掌中論語の講義』大修館書店。
諸橋轍次（1937）『論語人物考』春陽堂書店。

